

2016/2/25

「あなたとすれ違う人間は、愛すべき隣人か？」

文責:井守健太郎

無差別殺人の犯人はいいました「誰でも良かった」。犯人が憎んでいたのは特定の個人ではありません。社会そのものでした。

周囲の人間はこう言いました「一体どうして彼がそんなことを・・・」。犯罪は、悲しみ恐怖ではなく、驚きとして受け止められていました。

彼は、羨望の眼差しを向けられてもおかしくない、エリートだったにもかかわらず！  
一体何が、彼を殺人に走らせたのでしょうか。

日常的に周囲に受け入れられていないという不安。周囲と彼は分裂していました。分裂は、殺人という極限の暴力を誘発しました。

暴力はもはや日常茶飯事です。不安が最高潮に達し、憎しみの渦が巻き起こった事例を目標撃しました。

2015年、9月。安保関連法案の議決です。私は、「アベは、やめろ」と鳴り響くシュプレヒコールの只中に居ました。

驚きました。「答弁は尽くされた」と逃げる賛成派による無視！憎しみに身を任せる反対派による、「許すな」「かえれ」とときには「死ね」という言説！

私はどちらのやり方にも一切共感しません。ただただ、彼らの底知れない原動力に、驚きました。

他人との、あるいは社会との関係における「漠然とした不安」がときに憎しみに転化し、驚きの行動をひき起こす状況にあたること、私たちにも潜在する魔物です。無視、暴言、暴力—これらは日常的なコミュニケーションで起こり得ることです。

魔物は誰しにも巢食い、いつでも社会関係の中に出現しようとしています。日本国民の「連帯」出来ていない状況は、今後の日本に来るべき恐ろしい不安と、それによってエスカレートする暴力を予感させ、背筋を寒くさせるものでした。

無論、安保関連法案の議決は一事例でしかありません。移民を受容するか否か、格差社会を是正するか否か、あらゆる状況で、今日本社会は網目状に分裂しています。複雑に、あらゆる角度から分裂しています。

分裂を良い風にも解釈できます。つまり、個々人が様々な主義主張を持つことを善いとす解釈です。かつて、様々な身分で虐げられてきた人々が夢見た社会は確かに今到来しています。「歴史の終わり」と呼ばれるほど、その繁栄を謳歌しています。

そうした時代に逆行はできません。しかし、分裂ははっきりとディストピアであると断言したい。分裂は、人々が互いに信頼し、認め合う連帯を粉々に破壊します。

周囲の人間を信頼し認め合えないことは残酷です。

まず、人々は、不安に苛まれます。問いましょう、あなたは全く見知らぬ人々に対し、確信を持って自分の選択の正しさを主張することは出来ますか。

結婚に関するある興味深い調査があります。未婚者の階級帰属意識に関する調査です。結婚は自由な選択のはずなので、未婚も選択の一つのはずです。しかし、彼らは自らの帰属する階級をネガティブに評価しています。その一方で、周知のとおり、離婚率は増加し、選択の一つになっています。どうしてこのような一貫しない結婚状態に対する態度が生み出されているのでしょうか。理由は明白です。結婚状態に対する当たり前の見解がないからです。

結婚だけではありません。就職活動、あるいは冒頭に挙げた日常のコミュニケーションであっても、あらゆる場面で、分裂による漠然とした不安が人々を苛み続けます。

加えて、「仲間はずれ」にされているのではないかという感覚、疎外感覚をも生み出します。分裂によって、もはや誰が仲間すら分からない状態に陥るのです。

ヨーロッパや中東で止まないテロという過激な暴力の源泉が、こうした疎外にあることは多くの論者に指摘されています。誰が仲間すら分からないからこそ、彼らは徒党を組み、仲間を懸命に探します。仮にそれが、どれだけ過激なイデオロギーであったとしても。

本来であれば、多様性そのものが称揚され、歴史は終わるはずだった！否、多様性を認めようとする態度は、逆説的に、認め合えない、見知らぬ人々同士に分裂するディストピアを生み出してしまったのです。

こうした状況の改善を、つまり、より人々がお互いを信頼し認め合うことで、分裂とは対極にある連帯のある社会に至るための、処方箋とは何でしょうか。

連帯の核となる要素は2つです。相手と同じ目標に向かって動いているという感覚、そして、相手の人格に対する理解と配慮です。

身近に信頼している人を思い浮かべて下さい。サークル仲間だろうとゼミ仲間だろうと、一つのコミュニティの構成員ではないでしょうか。そのコミュニティは何であれ目標を掲げているはずですが、目標共有がなければ、信頼関係を築く土台がありません。

また、同じコミュニティにしようと、認め合うことができない人間とはよくいるものです。相手のことを知ってしまったが故に、です。そう、認め合えるか否かは相手の人格を理解することから始まります。逆に言えば、理解するからこそ、認め合うことのできる相手を選べる。

日本社会が分裂を克服し、連帯に至るためには、このミクロ的思考を応用する必要があります。連帯のためには、目標共有、人格理解と配慮、この2点の回復がカギなのです。

具体的に求められる方向性とは何でしょうか。

目標共有について。いくら日本社会全体にかかわる目標だからといって、それは狭い範囲で決められてはなりません。立憲主義を守ることにはいくら意味があっても、それは国会前を包囲するデモ隊の一部にとっての強い目標としか言えないのです。

国民全体で目標を共有するためには、それを「憲法」に、「憲法」にこそ表現していかななくてはなりません。出来るだけ解釈の余地なく、恒久的に効力があるものとして。

表現を可能にするためには、手続に対する同意がまず必要です。そのため、まずは憲法に規定された改正手続の要件が妥当かの投票を行います。こうすることで、どんな決め方になろうと、人々は表現されたものにコミットメントを行う約束を取り付けることができます。

その上で、初めて何が表現されるべきかの選択の段階になります。しかし、0からの選択は難しい。投票とは争点に対して行うものです。何もない状態から投票は出来ません。然るに、予め選択肢が与えられるべきです。私が考えるべきとする選択肢は、「一切の武力を破棄する態度を日本人が誇るべき態度か」あるいは「武力を持つとも結果的に国際平和に貢献することが誇るべき態度か」です。

なぜか。自分たちの目標とは、自分たちに固有にあるべきです。国際社会の中にあっても固有なのは、恒久的平和志向の態度です。固有であるなら、それを守るか捨てるかの議論は、私たちの様々な目標を共有する際、真っ先に決めていくべきです。もちろん、捨てる場合は、新しい固有な目標を創造していくことが求められます。

私たちはこうしてまず同じ目標に向かっている感覚を共有でき、相手のことを理解・配慮する土台に立てます。その上で、連帯のため、理解と配慮のプロセスに移行します。

理解は会話の中でしか成り立ちません。しかし見知らぬ人々との会話は不安が付きまといまます。そこで、予見見知らぬ人々の情報、つまり日本人の一般的な生き方・考え方の傾向を想像することが不安の軽減に繋がります。ここにいくつか具体的な生き方・考え方を例示します。

例えば、競争主義的な生き方。正義は勝ったものが決めるという態度です。「勝ち組」という言葉に代表されるような考え方が、当てはまります。続いて、日常の親しき人との関係を重視する生き方です。勝ったところで正義なんて何もない。そこで、日常を楽しく、意味を常に探していこうとする生き方です。サブカルチャーの分野では、こうした作品が大ヒットを生み出しています。

こうした相手の生き方・考え方の想像を行った上で、相手と会話をします。それが、一つの理解と配慮のための術です。

また、そうはいつでも、見知らぬ人々と会話する機会すら現代にはないです。アパートの隣に住む部屋の住人ですらも、会話したことない見知らぬ人でありうるのです。そこで、討論型世論調査を導入します。討論型世論調査は、社会問題という共通の話題を、無作為抽出された人々と話し合う制度であるからです。ここで話し合う内容は、結婚観について、あるいは労働観についてなど、身近に感じる話題についても含みます。

無作為抽出された見知らぬ人々と、その考え方を想像しながら話し、結果的に相互の人格理解を深めていく。こうして初めて、連帯に到達できるのです！

「あなたとすれ違う人間は、愛すべき隣人か？」—たとえコミュニケーションに苦しもうと、いつ暴力を働いてくるか分からなかりょうと、私はこの問いにイエスと答えたい。苦しむことがあろうとイエスと答えたい。

ただし、無償の愛とは理想でしかない。本弁論では極めて現実的な方向性を、提案しました。

「見知らぬ人々」から「愛すべき隣人へ」—不安と暴力の連鎖から豊かな愛の連帯へ。

連帯、そこには性別の壁もない。連帯、そこには世代の壁もない。連帯、人は常に生を豊かにする、隣人である！

ご清聴ありがとうございました。